

プ ラ ザ

「創立 100 周年記念特別シンポジウム」開催報告
Conference report of the 100th anniversary special symposium

林 由起子

Yukiko K. HAYASHI

座長

東京医科大学病態生理学分野

平成 28 年 11 月 5 日（土）、第 178 回医学会総会の特別企画として、「次の 100 年に向けてリサーチマインドを育てていくために」というタイトルで創立 100 周年記念特別シンポジウムが開催された。このシンポジウムは、近年活性化してきた本学の医学研究を今後さらに発展させるとともに、カリキュラムの改変や研修医制度・専門医制度改革などにより、今後医学研究を志す医師が減少し、また医学研究に費やすことの出来る時間も減少するのではないかという危機感から企画されたものである。

シンポジウムでは、在学中に限られた時間をやりくりして研究室に通って実験し、その成果を学会発表や英文論文という形で発信するというすばらしい業績を挙げた医学科 5 年 榎本悠希さん（演題名：Research should not be measured only by its DISTANCE, but also by its ANGLE）、医学科 6 年 伊藤謙太郎君・杉田翔平君（基礎医学の研究活動を通して何を学んだか）、臨床研修医 1 年 林田迪剛先生（Gift from motor protein, Myosin IIB and VI）の計 4 名、日々の診療から芽生えた疑問を解決すべく、日夜研究に励んだ経験を眼科学分野 臼井嘉彦先生（臨床医がリサーチマインドを持つことの意義）、皮膚科学分野 山本真実先生（皮膚のバリア機能の研究を通じて感じたこと：臨床医が基礎研究をする意義）の両先生、そしてリサーチマインドを活性化させるための本学の支援活動について医学総合研究所 中島利博先生（臨床医のリサーチマインドを育成・持続させ

る大学の取り組み）と、計 7 名のシンポジストによる各 7 分間の短いながらも非常に密度の濃い講演後、フロアからの質疑・コメントや提言などで、1 時間 20 分のシンポジウムはあっという間に終了し



た。

シンポジウム終了後にアンケートを行った結果、学生のレベルの高さに脱帽との意見が多かった。また今回は事前に学生にもアナウンスをしたため、少数ではあるが医学科および大学院の学生の参加があり、身近な先輩達の話に刺激を受けた学生も多かったようである。さらに早期からリサーチマインドを育むためには、低学年のうちに研究室の紹介や見学

など、医学研究にふれる時間をカリキュラム内にきちんと確保する工夫が必要であるとの意見が目立ち、今後の検討課題であると考えている。

医学研究は、医学の進歩に不可欠であるのみならず、「多角的な視点から本質を見いだす」という医療人として重要な資質形成にも必須である。より多くの優れた医療人が本学から巣立っていくことが、次の100年のめざすところであると考えている。